
おみやげ持って来い

寒月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

おみやげ持って来い

【Nコード】

N6532C

【作者名】

寒月

【あらすじ】

ある廃業した病院に幽霊が出る。そこは病院の三階の奥の部屋。部屋に入ると「おみやげ持って来い」というのだ。僕は肝試しに行った。

おみやげ持って来い

僕がその噂を聞いたのは友達からだ。近くの廃業した病院に幽霊が出る。どこでもある話だ。ところが、変わった幽霊で、それは病院の三階の奥の病室に住み、ドアを開けると、「おみやげもつてこい！」と大声を上げるのだ。必ず男の声で怒鳴るように言うのだ。同じ話は広まっていて、多少脚色は加えられているものもあるものの、同様な内容で信憑性がありそうに思える。

「行ってみようぜ！」

「やめよ」

「いいから、いいから」

半ば強引に連れられ、僕は友人と病院の前に立った。時間は夕方五時、もう太陽はすぐ沈むころだ。学校の帰りに僕はこんなことになるとは思っていなかった。

その病院は三階建て、崩れかけたコンクリートの壁には赤ペンキで落書きがあり、随分廃業したあとお客が来ていたようだ。

しり込み気味の僕を引つ張るように、友達は病院内に入れた。入り口のガラスは割られ、病院の廊下を歩く僕の背中には冷たい夜風が当たる。

病院内の内部はすでに荒れ果て、椅子は放り出されていた。空き缶や花火のかすやタバコが散乱している。

廊下から内科、耳鼻科、あと表札もなくなった部屋の室内を眺め歩いた。どれも似たりよったり、机が倒され、カルテが散乱し、部屋は荒れ放題。

部屋の先から微かに夕日の赤い光が差している。

「おい、帰ろうぜ」

僕は言ったが、友達は笑いながら、

「怖気づいたんの！」

「ちがーって！もう足元も見えないじゃないか」

「それが肝試しだろう。何心配すんな。大丈夫だって、何にも出やしないんだから」

「それでもこれだけ散らばっていたら、あぶねえーって」

「それもそうだな。まて、ここまできたら、三階見て帰ろうぜ」

急に納得した友達は階段を上り始めた。僕はしぶしぶ友達のあとについていく。

二階を通り越して、三階に廊下に出た。三階は一階や二階よりもなぜか薄暗い。しかもかび臭く、じめじめしている。割れた窓から夕日もほとんどなくなっていた。

「おい、あっちの部屋みたいだ」

友達はそういうと、ゆっくり進んでいく。僕たちの足音は妙に湿って響く。

やがて一番奥まで来た。そこはなんの部屋なのだろうか。見た目には病室みたいだが、ドアを開けないとわからない。そして、友達はゆっくりとドアノブを回し、開けて内部があらわになる。

一瞬だった。

そこは意外ときれいだった。

ベットがひとつあり、衝立がたててある。

そして、ベットに横たわる人の足が、起き上がるようなくさを見せた。

「土産持ってきたかっ？」

男の怒鳴る声がすぐに飛んできた。それに度肝を抜かれた僕らは慌てて、崩れるように逃げ出した。ようやく一階の廊下を走りぬけ、

「本当にっ。出たっな」

友達は言葉がうまく出せないで、息を乱している。

「ああ、驚いた」

僕も気持ちがあつかりしよげてなんとなく呟いた。噂は本当だった。

「あっ！」

おみやげ持って来い

友達がポケットやら、かばんの中やら見ている。

「どうした？」

「携帯落としてきた」

「持ってきてないんじゃないか」

僕は病院に戻りたくないばかりに願望を述べた。

「いや、持って来たよ。たぶんさっきの一番奥の部屋だ」

そう僕らは慌てて出てきた。そう僕らの選択は二者択一。戻るか。諦めるかだ。生理的に二度と遭いたくない現象に遭遇して、僕らはお互いの言葉を待ちあぐねていた。

(2)

数分の沈黙のあと、僕は自分の携帯でかけてみることにした。

着信している。あまり出て欲しくはない。しかも遠くで鳴っている音がする。そう病院の中から響いて微かに聞こえるのだ。10回ぐらい鳴らしたろうか。

そして、突然友達の携帯が出た。自分で言うのもなんだが、出るとは思わずに「うわっ！」

と、思わず声を出して、すぐに息を呑む。

「お土産もってこい！」

その一言で切れる。僕は怖くて声が震える。

「どうした？」

友達は怪訝そうに言う。

「おみやげもってこい！だと」

「幽霊が出たのか？電話に、どうしよう？」

「諦めようぜ」

「嫌だつて」

「おれはやだつて」

「おれだつてひとりじゃいけないよ」

辺りはすっかり暗くなり、僕らの会話だけがその敷地で響いている。そこにいるだけでも怖かった。

僕は妥協案として、明日の昼間とりに行くことを提案した。すると

「おみやげ持って行ったほうがいいのかな」

友達は殊勝に言う。妙な話だ。幽霊は確かに「おみやげをもってこい」と言った。

ゆづれいに言われておみやげを持っていく。そんな話聞いたことはない。

僕は思案に暮れていると携帯が鳴った。

着信を見ると友達の携帯だ。僕は怖くなって、電源を切ってしま

おみやげ持って来い

った。

「今日はとにかく帰ろう」

「うん。そうだな」

僕は怖気づいていた。そして、帰途に着いた。

その間、僕はまた行かなければならないのか。お土産なんて持って
いかなければならないのか。まるで合理的理由もない考えをひたす
ら巡らせていた。

(3) 再び廃業病院へ(前書き)

気軽に書いているので、文章は練っていませんが。

おみやげ持って来い

(3) 再び廃業病院へ

今日僕は廃業した病院の前で友達をその建物を見つめていた。しかも友達が遅れてきたために昨日と同じ時間帯になってしまった。改めて見ても気分がいいものではない。

「おまえひとりで行って来い」

「一緒に行ってくれ」

「……」

「一度、携帯で聞いてみるか？」

友達は何を思ったからそんなことをいう。

「……」

僕は半ば呆れて何も言えない。どうせ僕にかけさせるに決まっている。

なぜ行かなければならないのか。友達の付き添いで肝試しに行き、しかもその友達が携帯を落とし、それを取り戻すためにまたも病院に立っている。しかもお土産を手にとって……。さらにその友達は何も持って気やしない。お土産を友達に渡して帰りたい気分だ。おみやげはお酒。なんとなく思いついたのがそれだ。だいたい幽霊におみやげなど見当もつかないのだから、これでいいだろう。どうせこの世のひとではないから飲めるわけがない。

ためらいのあと、僕たちは懐中電灯をつけ病院に入った。割りに合わない。友達は僕を前にして歩いてやがる。静かな声で文句を僕は言った。

「おまえが先行けよ」

「いいから。いいから」

何がいいのか、僕は早く終わらせたいがために仕方なしに進んだ。緊張して自分たちの足音が震えている。その響きは長い時間の流れを感じさせた。

なぜだか上の階に行くほど、かび臭く空気が淀んでいるのはなん

だろうか。

そして三階に着いた。僕たちはお互い見つめ、歩き出した。

「おみやげもってきたよ〜」

友達は自分が持ってきたわけでないおみやげを幽霊に対して伝えている。僕はどうでもよくなって早く終わってくれないかと思いつながら、しかし幽霊からどう携帯を取り返すのか、その場になって考える始末だ。なぜ入る前に考えないのだろう。今更自分の機転の利かなさを嘆いた。

そして、もう廊下は真っ暗。手にするライトの光だけが、廊下の奥に伸びている。あと十歩ぐらいだ。友達は僕を後ろから押す。

「押すなって！」

それでも友達は止めないでいつの間にか幽霊のいる奥の部屋の前に着いた。

そして、しばらく取っ手に手を掛けたまま。

友達は後ろで促す。

僕は意を決して、開けようとした瞬間、ドアが開く。

「おみやげもってきたか〜！」

野太い声と共に、中から黒い影が出てきて、僕たちは驚いて、逃げ出した。

いや、逃げ出したのは友達だった。彼は一目散に上がってきた階段を駆け下りて行く。

「待って〜。ひい〜」

僕は逃げ出したいのだが、身体が前に進まない。服の首筋を掴まれている。僕はそのまま意識が遠のいていく。幽霊に掴まれている悪夢を見るんだろうな。そんな気がしたのをうつすら思い浮かべながら。

目を覚ますと（前書き）

廃業病院で男に出会い、なぜか一緒にカルテを探すはめになる。

おみやげ持って来い

目を覚ますと

目を覚ますとそこには無精ひげの男の顔があり、マジマジと見た後、自分が廃業していた病院にきていたのに気づいてさらに意識が遠くなる。

「おい、しょうがないやつだな、ほれ、起きろ！」

ビンタをもらって、意識がはつきりし、再びマジマジ無精ひげの男を見た。そして、自分の状況がうまく飲み込めないこともあって、僕は沈黙するばかりだ。

僕を起こした男はやがて腰を降ろして、僕の持ってきた酒を飲んでいった。

「ひさしぶりの酒はうまい。人と話すのも久しぶりだ」

男は酒を飲み、そして、流暢に話し始めた。声を聞くと若いのかもれない。といっても、高校生の自分よりはかなり年の差は離れている。男は自分がここにいる経緯を流暢に話しながら、酒を飲み、僕は相槌を打つのが精一杯なほどまくし立てるように言う。気性は荒いようだ。

その男の話によると、あくまで本人の話を自分の解釈で言うところの「この病院で昔、娘を亡くし、それは医療過誤で、裁判を起こすためにカルテを探しているという。しかし、裁判を起こす前に病院は廃業されて、手術を担当した医者は失踪。それでもまず、カルテを見つければ、その後医者を探し出して裁判を起こそうとしている」

実際そんなことがありえるのかはわからないが、少なくとも男は一ヶ月前からこの病院に住み込み、カルテを探しながら暮らしている。思わぬところで僕は友人の巻き添えを食い、その友人が今はいないばかりか、この男の巻き添えを食う羽目になった。というのも、「おまえもいつしよに探してくれ。報酬は裁判でがっちりもらえるはずだから」

そんなことを言うが、裁判に勝てばの話し出し、裁判は何年か

おみやげ持って来い

かるはず。しかもまだ裁判は始まっていない。僕はそれを承知で今日一日だけ同意した。ついでだからこの病院を見て、友人に自慢しようと思ったのだ。

四階は不思議ときれいで

「三階は探したがなかった。あとは四階だけ残っている」

病院は三階建てだと思っただが、勘違いで、僕らがいた奥の部屋からさらに古びた非常口のほうに行くと奥に階段があった。病院の入り口からは三階建てにしか見えなかったのだ。

男と一緒に四階の中ほどもまで行くと、僕はあることに気がついた。薄暗くてわからなかったが目が暗さに慣れてくると、廊下が下の階よりもきれいだ。肝試しに誰も四階まで来ないということだろうか。俄かには信じがたい。結構下の階には落書きや、ビール缶や花火の跡、不良グループが結構荒らしてある。怖いもの知らずはいくらでもいそうだが。

そんなことを思いながら、男性に問いかけた。

「部屋に入らなければカルテは見つからないのでは？そこから入りましょう」

「いや、そこは人が休んでるから」

「おじさんの他にいますか」

「ああ、入るよ。自分の方が新人だからな。あまり気を配らないのも悪い」

僕はホームレスでもいるのだろうかと疑問に思った。この階はきれい過ぎる。

まるでいつも清掃されているような感じだ。

「なぜ廃業した病院なのに、あそこの電灯は付いているのですか」

僕は先の方に白い光があり、そこにはよく病院にある待っている人のための椅子があるのを疑問に思い、男に聞いてみた。

「それはあそこは指定席だからさ」

「指定席？おじさんの」

「いや、別の人の」

「……」

おみやげ持って来い

僕はなんか腑に落ちない。それにこの階は確かに人の気配はする。まるで今でも使われていて、男が止めた部屋には病人の人が入るよ
うな……それ以上深く考えると怖くなるので、気分を逸らすために呼吸を落ち着けて、周りを観察する。

廊下の先には扉がふたつ

カサカサと音がする。音は小さく、そしてだんだん大きくなってきた、

僕らは立ち止まり、暗闇を凝視した。廊下の先から何か来るのは確かだ。暗くてあまり見えない。

「何かいる」

「なんだろう」

ほぼ同時に僕たちは答え、立ち止まった。奥の方から何か歩いてくる。

「人がいる」

僕は思わず言った。

「そんなはずはない」

男はそう答えた。

ゆっくりと近づいてきた。やがてうつすらと視認できるようになり、僕たちは安堵した。それは白い猫だった。それは何事もないように歩いてくる。そして、僕たちの前で一声猫鳴きをしたあと、そのまま通り過ぎていく。

僕たちが猫をかまわなかったのはなぜだろうか。少なくとも僕には理由があった。それは猫の陰が異様に大きかったからだ。それは猫の影にしては形も変だった。四本足がそれぞれ伸びていたわけではなく、僕には二本足が伸びていたように思えた。僕には人型に見えた。

「あれ人じゃないの？」

「なに言っている。猫だったろう」

男は気がつかない様子で心底不思議そうな表情を向けていた。確かにそばを通り過ぎたのは猫だった。

何事もないように男が進むので、後ろをついていった。やがてまた廊下の脇の小窓から外を眺めたが、街灯があるくらいで何も見えな

いはず……。実際はうつすらと人影があつたが気にしないようにしていた。不思議と怖さはなかった。男と突き当りまで来ると、「ここだな」と呟くようにいった。まるで知っていたかのように。

そこには左右二つの扉がある。何かいる。そして、右の扉からは乾いた物音、左の扉からは湿った物音がする。

「どうする？」

男は僕に問いかけた。

「開けないほうがいいんじゃないですか？」

天国と地獄だろつ。

カサカサと音がする。音は小さく、そしてだんだん大きくなってきた、

僕らは立ち止まり、暗闇を凝視した。廊下の先から何か来るのは確かだ。暗くてあまり見えない。

「何かいる」

「なんだろつ」

ほぼ同時に僕たちは答え、立ち止まった。奥の方から何か歩いてくる。

「人がいる」

僕は思わず言った。

「そんなはずはない」

男はそう答えた。

ゆっくりと近づいてきた。やがてうつすらと視認できるようになり、僕たちは安堵した。それは白い猫だった。それは何事もないように歩いてくる。そして、僕たちの前で一声猫鳴きをしたあと、そのまま通り過ぎていく。

僕たちが猫をかまわなかったのはなぜだろうか。少なくとも僕には理由があつた。それは猫の陰が異様に大きかつたからだ。それは猫の影にしては形も変だつた。四本足がそれぞれ伸びていたわけではなく、僕には二本足が伸びていたように思えた。僕には人型に見えた。

「あれ人じゃないの？」

「なに言っている。猫だつたらう」

男は気がつかない様子で心底不思議そうな表情を向けていた。確かにそばを通り過ぎたのは猫だつた。

何事もないように男が進むので、後ろをついていった。やがてまた廊下の脇の小窓から外を眺めたが、街灯があるくらいで何も見えな

いはず……。実際はうつすらと人影があつたが気にしないようにしていた。不思議と怖さはなかった。

男と突き当りまで来ると、「ここだな」と呟くようにいった。まるで知っていたかのように。

そこには左右二つの扉がある。何かいる。そして、右の扉からは乾いた物音、左の扉からは湿った物音がする。

「どうする？」

男は僕に問いかけた。

「開けないほうがいいんじゃないですか？」

「ただ聞いただけだ。こういうときは両方開けるもんだ」

「いややめた方が……」

男はそれを聞かず、そういうと

まず乾いた音のする方を開ける。するとそこから明るい光とともに、鳥が飛び出してきた。僕はおどろいた。鳩はしばらく飛んでいたが部屋の中に戻り、男はそれを確認するように扉を平然として閉めた。

「この部屋はちょっと俺には明るすぎる」

僕はもつと見てみたいような気がしたが、男はすぐに湿った扉のノブに手をかけた。今度は生ぬるい風とともにカラスが飛び出した。これまた僕はびっくり、早く閉めてくれと思った。しかし、男は閉めない。

鳥はそこらへんをかまびすしく、飛び回っている。

「鳩と鳥。まるで天国と地獄だろう」

この人は何を言っているのだろうと僕は思った。確かに平和の象徴の鳩、死神の使い鳥だが。

やはりおみやげ

男は部屋の中に入っていった。つられて僕も入っていく。何には棚があり、たくさんファイルが埋まっている。男はなにやら頷きながらファイルを取り出しては戻していく。

「そついえば、もうカルテは破棄処分だった。閻魔さまがいった。まったく合理化だと言つて」

ぶつぶつ言っている男は言葉ほど、苛立っているようには見えなかった。

「代わりに死亡診断書か。これじゃ、娘のカルテは見つからないな。そついいながらもなにやらあさつて、見ている。」

「死亡診断書しかない」

男は僕に知らせるように言った。

何か書いてあるが、他人の死亡診断書を見ても気持ち悪い気がするだけだ。

唐突に「おまえもある」と男は言った。

「はっ？なんで？」

「それはここにあるのが、生きている人間の運命を書いてあるからだ」

急に暗い目つきで男はそれを見ていた。

「何を言っているの？そんなのあるわけないじゃん」

僕のまともな見解を無視した男は視線をこちらに向ける。妙に目つきが怖い。

そもそもおかしいのは確かだ。やはりこの病院は三階建てだったと思う。四階に来て、

「おまえはあと三日後に脳挫傷で亡くなると書いてある」

「えっー！なぜ？」

「脳挫傷だから、高いところ落ちるとか、交通事故に遭うとか、事件に巻き込まれて……」

「……巻き込まれて……？何？」

「たとえばだが、通り魔にあつて頭を殴られるとか」

男の低い声はこの状況では怖い。そして、その手にはいつの間にか、太い棒を持っていた。

「江戸時代の話をしよう。ある男がいた。そいつは貧乏で、娘をなくし、貧乏を呪っていた。そして、あるとき自分の境遇を自分はいわば貧乏神。世の中に不必要なものはないと前向きに考えた。閻魔さまは娘のことは仕方ないが、男がその悲しみを乗り越えるまで、貧乏神であることを許した。男は貧乏神を祀った神社を建てた」

「へえ……」

僕はなんだかわからないが、

「その神社を造ったやつがしゃれていて、江戸の庶民を呼び込むときに『お参りなきときはこちらからお訪ねする』と」

そうですか、と感心する僕。すぐに自分のバカぶりを苦笑した。

「助かりたければ……」

「どうすればいいの？」

「明日……」

「明日？」

「おみやげ持って来い」

「はあ？」

僕は意外な答えにあっけにとられた。

「命とおみやげどちらをとるか、おまえの自由だ。」

すると男は棒を杖にしながら部屋から出て行く。出て行く間際にもう一言。

「来ない場合はこちらからお訪ねしよう」

僕はどうすればいいのだろう。とにかく男を追いかけた。すると男は消えていて、病院はもとの荒れ果てたままの廊下になっていた。

おみやげ持って来い

おみやげ持って来い

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6532c/>

おみやげ持って来い

2009年6月30日12時18分発行